Hideki Sugiyama

［指揮官たちのシリーズ］

伊東勤 智謀と意地と。

Tsutomu Itoh

4勝3敗、西武優勝。波瀾に満ちた今年のシリーズは、2人の新任指揮官が静かに火花散らす決闘でもあった。彼らは、自軍をいかにこの大舞台へと導いたのか。

いつもは無口でシャイな男が、大きな拳を作り「勝ったぞ！」と雄たけびを上げて精一杯の喜びを表現した。〝オレ流〟の中日・落合博満監督を破って日本一になったのは〝無色〟の西武・伊東勤監督だった。

「私たちは日本一になるための練習をやってきた」というオレ流に対し、西武はプレーオフの一戦一戦を戦い抜くことでたくましさを身につけていった。緊張感に満ちた戦いの中で摑んだ自信が、最後に出た。

「土壇場になっても、負ける気はしない」

そう語るのは2番を打った赤田将吾。

「一戦一戦たくましくなるのがわかった」

土井正博ヘッド兼打撃コーチも、若手の成長を肌で感じていた。そして「自分がプレーしたほうがどんなに楽か」と第6戦以降はベンチでサインを出すこともあった伊東監督。

「選手のひたむきな姿に熱くなった。ともかくナインやスタッフに感謝したい」

と言葉を締めくくった。

7戦に及んだ戦いの中で、落合監督は先手必勝のメンバーを組み、力のあるものから先に先発投手に起用した。そして最後に手詰まりを起こした。逆に伊東監督は、常に一番手を〝抑え〟としてベンチに置いていた。シーズン中のエースを2戦目、シリーズのエースを7戦目に配置し「第7戦が一番楽な展開になった」と平然と答えた。

「3度三冠王を獲った落合さんは素晴らしい選手だったかもしれない。でも優勝経験は少ない。僕はシリーズに13回も出ているんです」

応援団に日本一の挨拶をする西武ナインを横目に、落合監督はファンの前に選手を整列させ、深々と頭を下げ、後にこう語った。

「この経験は、選手にもオレにも財産になって明日の中日を作っていくだろう。素材に恵まれた選手に出会えて幸せだよ」

この10日間に及んだ熱戦を振り返ってみると、この二人の一年生監督は、誰も予想できない形で、最初の火花を散らしていた。

Tamon Matsuzono

Dragons vs. Lions
Baseball Final 2004

落合博満

Hiromitsu Ochiai

永谷脩=文
text by Osamu Nagatani

10月16日、シリーズ第1戦。

熱戦に水を差す49分間の中断は、落合監督の冷静沈着な一言から始まった。

「野球規則では、二塁はタッチプレーになるんじゃないの。併殺は成立しない」

一塁塁審の中村稔は併殺を認め、西武ナインはベンチに戻っていた。しかし主審橋高淳は、打者谷繁元信の捕手ゴロを野田浩輔が掴み、そのまま谷繁にタッチしたとしてアウトを宣告している。明らかに落合監督の抗議は正当で、併殺は成立しない。判定は覆った。

しかし、これでは収まらないのが伊東監督。さらに「ただいま、伊東監督の抗議により中断をしています」という審判団の場内アナウンスがその怒りを増幅させた。

「オレは抗議なんてしていない。審判に説明を求めているだけ。間違いを認めれば試合はやる。退場にするというならば、退場にしてくれて結構。納得できないことはイヤだ」

自らの主張を繰り返し、揺らぐことなく審判に立ち向かった。そのあまりに頑とした態度に、西武の球団代表・星野好男は「放棄試合」を覚悟したという。結局、審判が自らの非を認め、場内アナウンスをした時点で、2死二塁からのプレー再開となった。

落合監督は、野球規則や野球協約を暗記するほどに読み込んでいる。「ルールがすべてだ」という哲学を、冷徹なまでに貫き通した。一方の伊東監督は、これまでも頑固なまでに「筋」を通す生き方をしてきた。どんなに強い権力をもった相手に対しても同じだった。

そんな二人の性格が、シリーズ初戦の誤審をきっかけに早くもぶつかり、双方が自分のスタンスを譲らなかった。台風での試合中止も含めた「荒れ模様」のシリーズ展開を予見させる、そんな出来事だったともいえる。

落合監督と伊東監督。二人の指揮ぶりは、性格と同様に、まさに対照的なものだった。

落合監督は、3度の三冠王を獲得している大選手。あまりにも自分のやり方を貫き通す

ために〝オレ流〟と言われ、球界の内外で異端視されつづけていた。それは今季、中日の監督に就任しても同じだった。

監督就任の第一声は、こんなものだった。

「私はオールマイティの選手を求めていません」

つまりは〝オールマイティの三冠王になれる選手は自分だけ〟というのが本音だった。普通の人ならば周りの反感を買うだろう。でも、相手はあの落合である。その話を聞いた井端弘和は、妙に心が和んできた、という。

「お前は守りさえしっかりしていれば認めるよ、と言ってくれている気がしたんです」

これまでの中日の監督は、選手に対して〝ないものねだり〟の部分が多くあったため、自分自身かなり無理をしていた、と言うのだ。

昨年末に、バントの名人・川相昌弘を巨人から受け入れたのも、その言葉の延長線上にあった。川相は巨人で1度、野球を失いかけた男である。そんな川相が現役続行の意思を固めたとき、落合は川相に声をかけた。

「裸一貫で飛び込んでくるならば、いつでも受け入れるよ」――。

そして秋季キャンプ。落合の頭には〝テスト生として野球に打ち込む川相の姿を若手が見れば、きっと何かを感じ取ってくれる〟との狙いがあった。川相は当時をこう振り返る。

「若い連中と一緒にやれるならば来てくれ、と言われた。でも、テストを受けてくれよ、と言われた時には正直〝えっ？〟と思った。でも、その意図はすぐにわかりました」

犠牲バントの世界記録を樹立した40歳の男の、野球へのひたむきさ。外野の名手として欠かせぬ戦力となった英智も刺激を受けた。

「自分の甘さを感じた。でも、何かに秀でれば生き残れると、思えるようになった」

川相の姿を見せながら、落合は若手選手たちに時間無制限のバッティング練習を指示していた。つまり、〝プロの手本を目の前において、好きなだけ練習をやっていい、オレは見てるから〟ということ。当然若手は目の色を

主力が抜けたからといって、2、3年後を見据えたチーム作りをするつもりなんかない。

Tsutomu Itoh

1962年8月29日熊本県生まれ。熊本工高時代に甲子園に出場し、西武の練習生を経て'81年のドラフトで入団。正捕手として'85年からのパ4連覇、'86年からの3年連続日本一に貢献、以降もリーグ優勝8回、再度3年連続日本一と西武の黄金時代を支え続け、昨秋引退し監督に就任。今季はリーグ戦勝率2位ながら、プレーオフを勝ち抜きリーグ優勝。42歳

変えた。6年目の外野手・森章剛も〝ここでチャンスをもらえれば、一軍に定着できる〟と思ったという。

落合監督は、こう言った。

「オレはロッテに入団した時、ドラフト3位だった。誰も大して認めてくれていなかったし、〝あのフォームではダメ〟とも言われたからね。でも、プロに入ってくる以上は、必ず何かいいものを持っているはずだから、すべて自分の目で確かめたいんだ」

だから秋季キャンプでは、一・二軍の区別なしでの練習が行われた。それがそのまま今季につながっている。支配下登録選手70人のうち、56人の選手を一軍で使うことによって選手間の意識の向上が自然と図られたのだ。佐藤道郎二軍監督もこう証言する。

「監督はこっちが推薦した選手をどんどん使ってくれるので、二軍の連中はイキイキしていた。いくら結果を出しても上にあげてもらえない巨人との違いはここなんですよ」

一・二軍を分け隔てせず、チーム全体の意識を高めていくという落合監督の流儀。それは昨年の秋季キャンプの1カ月で、すでにチーム内に十分浸透していたのである。

今年ほど目的意識をもってプレーできた年はない。

「秋季キャンプの時期は〝戦っていない〟のだから、理想的な話はいくらでもできる。ウチの監督は、ペナントレースでも、シーズン前の方針を貫き通してくれたんです」

森繁和投手コーチがこう言うように、先発投手の起用法も〝分け隔てのない〟ものだった。しかし長峰昌司や小笠原孝ら若手が先発入りする中で、ベテランの野口茂樹は干されていた。〝ベテランでも中途半端なプライドを捨て去って一皮剥けないと若いチームには入っていけないぞ〟――。そんな信念に基づいて、川相を獲得したときとは正反対の扱いをしたのである。ちなみに今、中日が清原和博（巨人）を獲得するという噂があるが、そ

Koji Asakura

プロに入ってくる以上は、必ず何かいいものを持っているはずだから、すべて自分の目で確かめたい。

Hiromitsu Ochiai

1953年12月9日、秋田県生まれ。秋田工高から東洋大（中退）、東芝府中を経て'78年のドラフトでロッテに入団。'82、'85、'86年と三冠王を3度獲得（歴代1位）。その後中日、巨人、日本ハムと渡り歩き'98年に引退。通算成績は打率.311、510本塁打、2371安打。今季より中日ドラゴンズの監督に就任し、79勝56敗3分でリーグ優勝を果たす。50歳

れも川相のときと同様〝裸一貫で出直すならば〟というスタンスなのではないだろうか。

一・二軍の区別なし、については、コーチ陣についても同じ。「キャンプで決めるから」ということで、佐藤二軍監督以外はまったく白紙からのスタート。また、そのコーチの人選も実に落合監督らしいものだった。

「お前の現役時代の手首の使い方はすごかった。あれを中日の若い連中に伝えてほしい」

そう言われて、まったく縁がないのに突然コーチ就任を打診されたのが石嶺和彦打撃コーチである。石嶺に限らず、落合監督が呼んだコーチは、落合と一緒のチームにいたり、先輩後輩の関係だったり、というわけではなく、純粋に自分の目で選んでいた。また、〝選手に対して真剣に怒れるコーチ〟であることも重要だった。〝練習では選手を叱咤しながら鍛え上げるコーチがいて、試合になれば自分を活かすプレーを求める監督がいる。そのコンビネーションがあれば、選手たちは余分なことを考えずに自分の役割を果たしてくれる〟との目論見があったのだ。

荒木雅博や井端の証言も、その考えを裏付けるものである。

「今年ほど毎試合、自分の役割を考え目的意識を持ってプレーできた年はない」(荒木)

「相手のことはオレたちベンチが考えればいい、お前たちは自分のプレーをしてくれればいい、と何度言われたことか」(井端)

投手の交代時期について、ある程度の権限を任された谷繁もこう言った。

「グラウンドでプレーするこっちの意見をしっかり聞いてくれるからやりがいがあった」

落合監督の現役時代からの趣味のひとつに〝人間洞察〟というものがある。暇さえあれば、人間を観察していた。落合監督はその経験を最大限に活かす方法をとった。シーズン中も、誰が一軍コーチに適しているか、誰が二軍での若手育成に向いているかを見極め、一軍、二軍の人事を積極的に動かした。そうすることで、ベンチ内も常にフレッシュで、活気に満ちた雰囲気を保ったまま、長いペナントレースを乗り切っていったのだ。

監督は現役時代から僕たち選手をずっと見てきた。

一方、伊東監督は「コーチは選手と一緒になって動けないといけない」という持論に基づき、チームのスタッフを若手で固めた。実は監督就任直後、堤義明オーナーから清原の復帰を打診されたが、「チームが若返りを図ろうとしているのに、逆行するのはおかしい」と突っぱねたことがあった。シリーズ第1戦の中断時に見られた伊東監督の「筋」を通す姿勢は、このころから一貫していた。

そんな若いコーチ陣の中でたった一人、ナインから〝おジイちゃん〟と呼ばれ、親しまれている長老がいる。土井正博ヘッド兼打撃コーチである。清原の西武入団時にコーチを務め、松井稼頭央(メッツ)のスイッチヒッター転向の時にも立ち会った名伯楽。そして、今度の役目は中島裕之ら若手を一人前に仕立てることだった。還暦を超えてなお、キャンプで自らバッティング投手を買って出ての熱心な指導。若手が心打たれないはずがない。

「僕らのために一生懸命にやってくれる姿を見て、早く一人前にならなければ、と本気で思った」(中島)

こうして、今季から背番号を「3」に代えた中島は、レギュラーとして一人前の成績を残した。しかしその陰で、土井ヘッドは伊東監督に「必ず監督に恩返しをするときが来ます。だから、それまでは我慢して使ってやって下さいよ」と頼み込んでもいた。名コーチと青年監督、二人の息が合ったことで、新しい看板選手が誕生した。

しかし、伊東監督は今年を単に若手育成の年、と位置づけていたわけではなかった。

「松井稼頭央が抜けて、カブレラも故障で復帰が遅れている。そういった中で、2、3年後を見据えたチーム作りをするつもりなんかない。今季から勝負をしていきたい」

Hiromitsu Ochiai × Tsutomu Itoh

伊東監督は2月のキャンプでそう語っていた。そしてその言葉通り、ペナントレースでの2位、そしてプレーオフでダイエーを下してのパ・リーグ優勝を勝ち取ったのである。

伊東監督は、西武の黄金時代からマスクをかぶり、8度の日本一に輝いている。もちろん目指すのは、「守備を中心にした本来の西武野球」。まずは捕手・伊東に代わるべき正捕手の育成が課題となった。野田と細川亨に対し、自らバットを持っての居残り特守を連日行った。中日・落合監督が「レギュラーの一人が欠けても、私は何とも思いません。代わりはいつでも出てくるものです」と平然と構えていたのとまさに好対照で、伊東監督にはそんな余裕はなかった。捕手だけではない。1、2番育成も急務だった。幸い佐藤友亮、赤田将吾が大きく伸びた。松井稼がチームを去り、2番の小関竜弥がスタメン落ちする中での「ひょうたんからコマ」だった。

「赤田は内野手をやっていたからスローイングが早いし足もある。外野が故障者ばかりだったので守らせてみたら好結果が出た」(清水雅治守備走塁コーチ)

当初は土井ヘッドの特訓メンバーに入っていなかった佐藤は、中島や赤田が練習を行う時、必ず隣のケージに入ってマシンを打ち続けた。

「同じレベルの若手が揃っていたから、調子がよければ使ってもらえると思った」(佐藤)

さらに土井ヘッドは、赤田には「左打席と右打席は別人間と考えて、二人分の練習をしろ」と言い続け、佐藤には「赤田が二人分やっているのにこの練習でいいのか。今泣くのか、将来泣くのがいいのか」と尻を叩き続けた。新1、2番コンビはこうして誕生した。

その他、故障で復帰が遅れたカブレラの穴を埋めた貝塚政秀も、急速に伸びた者のひとり。「チャンスを与えられたことで、必死になれた」と本人も言うように、伊東監督とコーチ陣は決して「ないものねだり」をせず、現有戦力にうまくチャンスを与えることでチーム内の活性化に成功した。チームリーダーの和田一浩もその手腕をこう評価している。

「監督は現役時代から僕たち選手をずっと見てきたし、性格もよく知っている。コーチ陣も若い選手を上手に競い合わせていた」

秋季キャンプの時から、新しい発見を日々繰り返して戦力を整えてきた落合監督。一方長い間西武というひとつのチームに在籍し、じっくりと選手を観察し新しい花を咲かせた伊東監督。〝目玉焼きを食べるとき、一番おいしい黄身から食べる〟のが落合だとすれば、伊東は〝黄身は最後まで残して食べる〟タイプだろうか。その考え方の違いが、シリーズでの投手起用にもあらわれていた。

「短期決戦では先発投手が三人いれば十分、一番いい投手に数多く投げてもらうためには、誰もが納得できる初戦だろう」(落合監督)ということで、中日は初戦に川上憲伸をぶつけてきた。一方の伊東監督は、松坂大輔を第2戦に温存した。伊東監督の現役時代、特に森祇晶が率いた黄金時代の西武は、シリーズで「2戦目重視」の戦い方をした。その踏襲ともいえる。森も捕手、伊東も捕手、常に負の考え方に立って采配をするという「捕手型」人間の性格がここで出たともいえる。

しかし、面白いことがある。落合監督は、伊東監督を「アウトコースを主体とした当り前のリードをする男」と分析し、伊東監督は落合監督を「基本的にセオリー通りにやってくる。ギャンブルはあまりしてこないタイプ」とみている。つまり、どちらも相手のことを「わかりやすい」と思っているのだ。

「急に特別な事をやろうとしたって、できるわけないだろ」

落合監督のこの言葉を、そっくりそのまま伊東監督も胸に秘めている。それぞれがそれぞれのやり方で築き上げた両チーム。激闘の末、「普段着野球」を貫くことができた方が、日本一の栄冠を勝ち取った。■